



講演会での小林深雪氏による試射

● パラリンピック金メダリスト小林深雪氏講演会

トリノの空に金メダルを掲げて - 目標を持って人生を歩む -

平成 18 年 7 月 6 日木曜日の午後 4 時 30 分から約 2 時間にわたり筑波技術短期大学視覚部鍼灸学科卒業生で 2006 年 3 月に開催された第 9 回冬季パラリンピック・トリノ大会金メダリストの小林深雪さんの講演会が開かれました。

本学での小林さんの講演は 2 度目となります。前回の講演は長野大会での金メダル受賞のお祝いを兼ねての筑波技術短期大学視覚部主催での講演会でした。今回の講演会は全学を挙げて先輩の栄誉を讃えるべく企画されたもので、会場となった春日キャンパス講堂には字幕用スクリーンや手話通訳者が準備され、聴覚に障害をもつ産業技術学部の数多くの学生も参加することができました。



講演会での情報保障、手前が字幕タイピスト、中央は手話通訳者



小林深雪さんは、長野県小谷村出身で松本の盲学校を経て筑波技術短期大学鍼灸学科の二期生として入学、鍼灸・手技療法学を学び、卒業後は都内の特別養護老人ホーム勤務を経て、現在日立システム・アンド・サービスに所属しています。

特別養護老人ホームへ就職後、1998 年 3 月に出身地である長野で開催された第 18 回冬季オリンピックに続いて行われた第 7 回冬季パラリンピックの女子バイアスロン競技で初の金メダルに輝きました。長野パラリンピック初の金メダルで有ったことから翌日の新聞各紙のトップを飾りま

した。また2002年3月に開催された前回のソルトレーク大会では選手団の旗手をつとめ、今回のトリノ大会では2度目の金メダル獲得という偉業を成し遂げました。



トリノでの金メダル

しかし講演の中では、自らの障害のこと、スキーをはじめから冬季パラリンピック長野大会で金メダルを獲得する迄の経緯。またソルトレーク大会では旗手としての重圧と、全盲クラスに出場すべきところを違うクラスに出たために惨敗したこと、そして転職しアマチュアとして競技を続けていくことの難しさとその克服について。さらに企業の支援を受けての競技生活とそれに伴う責任など、金メダルの裏に隠された貴重な体験をお話して下さいました。

実演コーナーでは、実際の競技用ライフルをお持ち頂き参加者に射撃の実際を見せて頂きました。普段に目にする事のないライフルで、音声を用いた照準的中させる難しさを実際に参加していた学生が体験することも出来



ビームライフルの体験試射

ました。

小林さんは現在、次の大会に向けての合宿とその合間を縫って障害者スポーツの普及活動に活躍されています。今後とも、小林さんの活躍を本学を挙げて応援したいと思います。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 野口 栄太郎

追伸：小林深雪さんは昨年（平成18年）、同期生と結婚され、現在は、井口深雪さんとして選手活動を送られています。

● 第8回 WBUAP 盲人マッサージセミナー報告

- アジアの視覚障害者とともに歩む大学を目指して -

「マッサージ師の質の向上と働く場の拡大」をテーマに、世界盲人連合アジア太平洋地域協議会（WBUAP）の第8回盲人マッサージセミナーが、日本盲人福祉委員会（笹川吉彦理事長）と筑波技術大学（大沼直紀学長）の主催で、平成18年9月22日～25日迄の4日間、つくば国際会議場で開催されました。以下、組織委員会の事務局を担当した立場から今大会を振り返り、今後のアジア支援の在り方を考えてみます。

アジアの障害者を取り巻く教育、就労、医療、情報保障などの環境は、「国連障害者の十年」から続いた20年以上に渡る国際的取り組みによって、飛躍的に向上しました。しかし、視覚障害者に限って言えば、周辺の発展の陰で、働く機会さえ与えられない当事者が、未だ圧倒的に多く居ます。例えば、モンゴルにおける視覚障害者の就業率は2%にも及びません。この数字は、発展途上国の標準的な状況を示していると思われます。

アジアの視覚障害者を覆い続けてきた、こうした深刻な

職業問題を、マッサージの普及をとおして改善しようという狙いで、このセミナーが始まりました。1991年の西安大会（中国）が最初で、2年に一度の「祭典」です。日本開催は1993年に続いて2回目になります。今回の大会には、フランスを含む17の国と地域から300人を越える参加者が集まりました。海外からの参加者は65人で、そのうち36人は、筑波技術大学が日本財団の助成を受けて、AMIN設立準備会議（後述）に招聘したマッサージの指導者たちです。

セミナーでは、講演、カントリーレポート、研究発表、シンポジウム（筑波技術大学国際シンポジウムを含む）、実技セッションなど50のプログラムが企画され、これまでにない充実した内容だったと自負しています。また、会場には、アジアのマッサージを体験できる市民向けのコーナーが特設され、もう一つの国際交流の架け橋を演出しました。

ところで、舞台裏の主役たちの奮闘を抜きに、このセミ



開会の挨拶に立つ笹川理事長



本会に組み込んで実施された本学国際シンポジウム

ナーの成功は語れません。一つは、高度な医学用語を含んだ5ヶ国語（英、中、韓、タイ、日）の同時通訳を見事に演じた通訳者たちの頑張りです。国内の国際学会では日英間の通訳が一般的で、5カ国語の同時通訳はつくば国際会議場でも例がありませんでした。通訳チーム11名の中には、日本の盲学校理療科出身者8名が含まれていましたが、まさに、国際視覚障害者援護協会と盲学校が長年続けてきた留学生受け入れ支援の結実を見る思いで感慨深いものがありました。また、大会期間中の即時的点訳サービスを含め、膨大な点字資料（抄録集など11タイトル）の作成を担当した、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター所属の点訳後援会の方々、さらに、移動や食事の介助、買い物のガイドなどに献身していただいた100人を越えるボランティアの方々に、この紙面を借りて心からお礼を申し上げます。

最後に、これからのアジア支援の在り方について述べさせていただきます。日本のアジアに対するマッサージ支援はNGO、盲学校、民間が中心になって30年以上続けられてきました。2003年度からはJICAによる政府レベルの指導者育成事業が加わり、すでに20名近い人材を輩出してきました。こうした事業は今後も続ける一方で、アジアに撒かれたこれらの種が実を結ぶまで育て上げること、これが、これからのアジア支援のテーマです。その支援は、当事者の自助・共助を側面からサポートする形が望ましく、セミ



送別レセプション

ナーの最終日に開かれた「アジア視覚障害者医療マッサージ指導者協議会」(AMIN:アミン)の設立準備会議は、そうした事業の中核となる、当事者ネットワークの構築に向けた第一歩を印す会議でした。この会議で本学は、AMINの事務局として、アジアの視覚障害者と共に歩む意志を明確にしました。この「宣言」に呼応する動きがすでに出始めています。AMINへの理解と協力の輪が大きく広がることを期待しています。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 藤井 亮輔

● 第9回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議 (APCD2006)

1. 会議の概要

第9回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議 (APCD2006) が平成18年10月9日～12日の4日間、東京都、市川市、つくば市において開催されました。アジア太平洋地域の17カ国・地域から約150名の参加者があり、国内からも1000名の参加がありました。筑波技術大学は、筑波大学附属聾学校と共に主管校となり、大沼直紀学長が会議全体の実行委員長を務めました。聴覚障害教育に関する日本での国際会議は、1975(昭和50)年に第14回聴覚障害児教育国際会議を東京で開催して以来、31年ぶりのことです。「聴覚障害教育の専門性の継承・革新・共有」をテーマとした今回の会議では、予定されたプログラムが滞りなく進行し、大きな成果をあげることができました。

2. 開会式・全体会

東京・文京シビックホールで行われた開会式には秋篠宮

文仁殿下がご臨席になり、「この会議において関係者の交流が深まり、世界の聴覚障害教育が一層発展していくことを期待しています。」とのお言葉をいただきました。全体会では、APCD会長ボウ・スイメイ女史が基調講演を行い、タイ、中国、スリランカ、韓国、フィリピン、日本の聴覚障害教育の現状が紹介されました。

3. 研究協議分科会・歓迎レセプション

第2日は東京・椿山荘に会場を移し、12の研究協議分科会と家庭教育を考える会が行われました。夕刻からの歓迎レセプションでは約600席のテーブルにフランス料理のフルコースが供され、アトラクションとして「日本舞踊と墨アートと太鼓」「箏曲演奏」「ピアノ演奏」「お茶席」などの趣向が凝らされて、中国、韓国などの参加者による飛び入りの歌や踊りもありました。



文京シビックホールで開会の挨拶をする大沼学長



歓迎レセプションでの「日本舞踊と墨アートと太鼓」

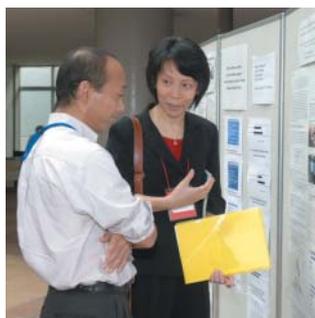
4. 筑波技術大学「高等教育・生涯教育」研究協議分科会

第3日には筑波技術大学天久保キャンパスに国外から約60名、国内から50名ほどが来学し、本学からも教員や学生数十名が参加して「高等教育・生涯教育」研究協議分科会が開かれました。参加者は午前10時に講堂に集まり、学長から歓迎の挨拶がありました。それに続いて、学外の人たちを対象として本学学生の案内で学内見学を行いました。案内した学生には多くの質問が寄せられ、一緒に写真を撮るなどして好評でした。



筑波技術大学での授業見学

本学の姉妹校であるアメリカのロチェスター工科大学・国立聾工科大学 ウィリアム・クライマー教授による基調講演で午前中の日程が終わり、昼食の時間を利用してポスター発表を行いました。コミュニケーションホールの開放的な空間に机といすが並べられ、本学を中心としてフィリピン



本学でのポスター発表

とアメリカの発表を加えた10件のポスターが掲示されました。ゆとりのある時間の中で、発表者と参加者との間で活発に意見交換がなされました。

13時30分から講堂で口頭発表が行われました。ステージには3面のスクリーンが並べられ、日本語・英語間の音声通訳、日本の手話、日本語字幕、英語字幕による情報保障が準備されました。本学からの2件を含めて8件の発表がありましたが、日本語・英語間の逐次通訳に予想以上に時間がかかり、限られた時間の中では十分な質疑の機会を

設けることができませんでした。できるだけ多くの情報を参加者に伝えたいという発表者の熱意があっただけに、ディスカッションができなかったことは心残りでした。

なお、この日に筑波大学附属聾学校では授業公開、授業研究会などが行われました。

5. 全体会・閉会式

最終日は「これからの聴覚障害教育」をテーマとして全体会が開かれ、3件の講演がありました。閉会式では、次の会議を3年後にタイ・バンコクで開催することが紹介されました。

6. 本学スタッフの活躍

今回のような1000名規模の聴覚障害者参加の国際会議では、音声通訳に加えて日本の手話、アメリカ手話、日本語字幕、英語字幕による情報保障が会議成功の鍵を握ることになります。そのための準備、運用にかかる要員の負担とシステムの複雑さは希にみるものとなりました。担当した本学障害者高等教育研究支援センター教員と技術職員の連日深夜に及ぶ献身的な努力によって、会議の進行を円滑に進めることができました。



筑波技術大学での情報保障の様子

7. おわりに

4年前、台北におけるAPCDの席上で次の会議が東京とつくばで開催されることが公にされて以来、本学は全学をあげて準備を進めてきました。この会議はアジア太平洋地域の聴覚障害教育関係者に本学の教育研究活動を知ってもらうよい機会となりました。本学に寄せられる期待は今後ますます大きなものになっていくに違いありません。

特命学長特別補佐（国際関係） 根本 匡文

● 情報・理数点訳ネットワークが始動

視覚障害者の大学進学が一般化するなか、その学生たちのための学習資料の整備が重要な課題となっています。なかでも、情報処理など理工系分野の点字図書の製作が急務といえます。近年、PCやインターネットによって視覚障害者の学習環境が変貌しました。その結果、点字図書だけが頼りと言う訳ではなくなりました。ですが、点字図書は、全盲者など重度の視覚障害者にとって、最も確実な学習手段です。多様化した学習環境に対応できる技術や学力をしっかりと身に付けられるようにするためにも、理工系点

字図書の存在は欠かせません。

大学生の点字教材の製作は主に点訳ボランティアに委ねられています。そうした点訳活動ではPCやインターネットの利用が進み、種々の分野の学習書が効率的に点字化されるようになりました。ところが、理工系図書については点訳があまり行われていません。このような状況に対し、視覚障害学生や大学関係者の困惑の声も聞こえます。その背景には、理工系図書の点訳技術が十分に行き渡っていないことがあります。



点訳研修の様子



情報・数理点訳ネットワーク開設準備会議

文部科学省の特別教育研究経費による「高等教育のための学内外視覚障害者アクセシビリティ向上支援事業 視覚障害者用学習資料の製作拠点の整備」で視覚障害者用教材の充実に取り組んでいる障害者高等教育研究支援センターでは、その一環として、「筑波技術大学情報・理数点訳ネットワーク」を立ち上げました。これは、本学や他大学での教育に利用できる理工系図書の点訳を行うグループの連携組織です。現在、首都圏の六つのグループが参加しています。

<発足までの準備>

今夏、その準備のために、情報処理用点字の研修を行いました。理工系図書の中でもニーズが多いのは、情報処理関係の図書です。その点訳に用いる情報処理用点字を学ぶ研修会を、各グループ2回ずつ、計12回、それぞれの活動拠点に向いて実施しました。見慣れぬ記号や表現、そして特殊な点字体系に接し、ベテランの点訳者たちも、真剣に研修に取り組みました。

一方、複数の点訳者による分担作業では、点訳の方法についてのルールをきちんと定めておく必要があります。そこで、本ネット独自の「点訳基準」を、この分野の点訳で豊富な経験を持つ点訳者の協力を得て策定しました。書式についての

決まりを中心に、その内容は細部に渡っています。

平成18年9月14日には、各グループから2名ずつが本学に集まり、準備会議を開きました。点訳基準の最終調整や、今年度に点訳する図書の分担割り振りなどを行うとともに、本ネットの特色ともいえる、「専用サーバの利用」について取り決めました。

<サーバを核に活動開始>

10月、各グループが点訳に着手し、同時に本学に設置した専用サーバにメーリングリストが設けられました。これには、6グループの会員77名と本学教職員6名が加入しています。点訳上の疑問やそれに対する助言、点訳方法についての提案などがこのメーリングリストに寄せられています。こうした情報や意見の交換が、専門的なノウハウの蓄積をもたらすものと期待できます。

本ネットでは今年度末までに10数冊の情報処理関係図書の点訳を完成する予定です。製作された点字図書は電子データ形でサーバに所蔵されます。そのようにして整っていく点字図書が視覚障害学生や大学関係者などに広く利用されるよう、今後、体制の充実を図る運びです。

障害者高等教育研究支援センター 長岡 英司

● 視覚・聴覚障害に関連する切手展

平成18年7月22日、8月5日、9月8日（春日キャンパス）、7月25日（天久保キャンパス）の大学説明会やオープンキャンパス、10月14日～22日の毎日新聞つくば駅前移動支局において、視覚・聴覚障害に関連する切手の展示を行いました。これらの展示会に関する記事は毎日新聞茨城版7月22日及び10月20日にそれぞれ掲載されました。

2年程前より、このテーマに関する切手の収集を開始し、当初の予想よりも、数多くの切手が存在することがわかりました。そこで切手の一部を大沼学長にご覧頂いた所、前述のような展示会の開催の指示を受けました。本稿では今回の展示した切手の概要について紹介させていただきます。

視覚障害に関連する切手の最古のものは、1916年にボスニア・ヘルツゴビナから発行された、「失明した兵士を誘導する少女」を描いた切手です。これは第1次世界大戦によって戦場となったヨーロッパでこのような失明者が多く生じた事を反映しています。

1925年にザール(ドイツの属州)から、最初の盲導犬の切手が寄付金付きで発行されています。盲導犬の組織的な訓練は第1次世界大戦後のドイツで失明軍人のための始まり、この切手はこの事実を反映しています。盲導犬の切手はその後、1964年にオランダ、1971年にオーストラリア、1979年にアメリカと発



「失明した兵士を誘導する少女」を描いた切手

行され、1980年以降はおよそ18カ国で発行されています。盲導犬の切手は西欧先進国で多く発行されており、この事も盲導犬の普及の状況をよく反映していると思われます。

点字の発明者であるブラユの最古の切手は1931年にアルゼンチンで発行された通常切手で、ついで、1949年に母国のフランスより発行されました。点字発明150年の記念切手が1975～76年に東ドイツ、アルゼンチン、ペルー、ウルグアイ、ルクセンブルク、マリなどから発行され、何れもブラユの肖像が描かれています。

1938年にフランスから「ラジオを聴く盲人」を描いた寄付金付き切手が発行されました。この寄付金は盲人へのラジオ配布に使われました。今もそうであるように、この当時からラジオが視覚障害者にとって重要な情報源であったことを示す切手です。

失明予防の宣伝切手がアジアの開発途上国から多く発行されています。その中で印象深いのは1976年にバングラデシュが発行した切手で、視機能に重要なビタミンAを豊富に含むトマトや牛乳などの絵が描かれています。このことは切手の発行当時、これらの国では失明の原因として栄養失調によるものが多かったことを示しています。

切手上に、点字を画像として描いた図案も多数あります。特に切手の表面に実際に点字をエンボス加工によって示した切手は1974年にブラジルで発行されたものが最初で、その後多くの国で発行されています。わが国の点字のエンボス切手は1988年の第16回ハビリテーション会議（リハビリテーションと点字表示）と1990年の日本の点字制定100年（てんじと点字表示）の2種類があります。

アジア・アフリカの開発途上国では触覚を生かした手作業によるカゴなどの製作が視覚障害者の主たる仕事といわれています。このような製作風景を描いた切手はフィンランド（1954年）、トランスカイ（1977年）、アルジェリア（1981年）、ジャマイカ（1981年）、ケニア（1992年）で発行されています。

聴覚障害関連で最古の切手は1931年にオランダで発行された、「口話法の訓練」を描いた切手です。これは戦前では口話法が聴覚障害者の教育の中心であった事を示します。時代が下るにつれて、代わりに手話を描いた切手が多くみられるようになります。

聴覚障害教育の先駆者も切手に描かれています。フランスで初めてろう学校を創設したアベ・ド・レベの切手は1959年にフランスより発行されています。また、ドイツで口話法の教育を始めたザムエル・ハイニッケの切手は1978年に東ドイツより発行されています。アメリカのろうあ教育の創始者のトマス・ギャローデットは1983年にアメリカの20cの通常切手として発行されています。

電話の発明者として有名なグラハム・ベルは聴覚障害の教育に多大な貢献をしました。ベルの切手は1940年のアメリカを始め、数えられないくらい多く発行されています。

聴覚障害関係の切手で最も多い図柄は手話を描いた切手です。最古の手話切手は1955年にユーゴスラビアで発行された世界ろう者会議の切手です。わが国では1991年に第11回世界ろう者会議の切手が発行されています。手話



10月14日～22日の毎日新聞つくば駅前移動支局での展示

の切手で最も有名なものは何といたっても1993年にアメリカで発行された I LOVE YOU の手話の連刷切手です。

以上、視覚・聴覚障害に関連する切手について、その概要をご紹介させていただきました。今回の展示によって、視覚や聴覚障害に対する理解がさらに深まることの一助になれば、幸いです。

なお、聴覚障害関係の切手に関しては聴覚障害者切手クラブの集友諸氏、聴覚障害の図案に関するご助言を大沼学長より頂きました。また、今回、広報委員会委員長の小野教授はじめ諸先生方のご尽力でこのような展示をすることができました。ここに心より御礼申し上げます。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 大沢 秀雄